▼村雨金五郎（前後十六巻）

帝キネ芦屋時代映畫

脚色者　上島量氏
監督者　森本登良夫氏
撮影者　和志田誠氏
主演者　市川百々之助氏
紹介　第二百五十三號

赤穂義士を配して最後に公私の仇討を遂げると云ふ俠客傳で前篇では刃傷の早打。後篇では義士引上げなどを見せて居る。上島量氏の脚色は忠臣蔵の一節の挿入で僅かに持ちこたえて居る感で他は芝居氣澤山の俠客傳から一歩も出て居ない。森本登良夫氏の監督は先づ普通、強いて長所を求めるならラストに於る富森兄弟の公私の仇討をカットバックで見せた件りが相當効果があつた位であらう。大詰の義士引上げは立派であつた。市川百々之助氏の金五郎最初から一方の旗頭と云ふ役なので大きく見せ樣として居るが何うしても無理がある。そして丁度此役も妻三郎の「大義」同樣松之助が好んでやりそうな役柄なのは一寸皮肉を感じた。ラストの義士引上げに於る兄弟の別れは好い味があつた。近頃いやに大役が付く林誠之助氏の助右衛門は昔ながらの貧相が役を引立たせないが演技は相當見せて居る。霧島直子嬢のお花は酒にまぎれて金五郎に思ひを打明ける最初の茶屋の件りが此役の最も演所だが醉態は未だ堂に入つて居ない。そして「勤王か佐幕か」同樣の前篇の終りで殺されて了ふのは呆氣ない、東良之助氏の五郎藏は後篇で味を出して呉れた。三十郎を强請る邊りから富森兄弟の對話を聞いて改心するまでうまいと思つて見た。片岡童十郎氏の大石内藏之助は引上げの場で一寸顔を見せる丈だが貫目があつて頗る好かつた。

――山本　緑葉――

興行價値――義士外傳とも云ふべき俠客傳だから大衆から受ける要素を豊富に持つて居る。（三月十二日前篇、三月十九日後篇　大阪芦邊劇場、神戸相生座、京都キネマ倶樂部封切）